

# 野火

## 映画文学人生論

原作：大岡昇平（1951）「展望」  
監督：市川崑（1959）参考：『俘虜記』（1948）「文学界」  
出演：田村 船越英二『レイテ戦記』（1971）「中央公論」  
安田 滝沢修 脚色：和田夏十  
永松 ミッキー・カーチス 撮影：小林節雄  
軍医 山茶花究 音楽：芥川也寸志

汝の右手のなすことを、左手をして  
知らしむることなかれ

市川崑監督の映画『野火』を観て、その余勢を  
かり、大岡昇平の原作を読む。さらに時間をおい  
て『俘虜記』と『レイテ戦記』を読み、遅ればせ  
ながらやっと戦争文学の読書ノルマをはたしたよ  
うな気分になった。

ただし、一度通読しただけで内容を十分に理解  
できるわけがなく、ノルマをしつかりはたしたか  
どうかは自信がない。

フィリピン山中をさまよう日本軍敗残兵の田村  
一等兵は、ある日、海岸の林の上に光るものを見  
て、それが十字架であることに気がついた。少年  
のころ、彼はキリスト教のロマンチックな教義に  
心酔し、将来は牧師になろうと思ったが、その後  
彼の積んだ文学的教養はどんな宗教も否定するも  
のだった。

ところが、飢餓状態のとき、屍体の肉を食べよ  
うとすると、剣を持った彼の右の手首を、左の手  
が握った。「汝の右手のなすことを、左手をして  
知らしむるなかれ」。

『俘虜記』では、一人の若い米兵が目の前に現  
れたとき、日本人敗残兵の右手は自然に動いて銃  
の安全装置を外した。不意に右手山上の陣地で機  
銃の音が鳴り、米兵は振り向いた。立ち止まり、  
暫くその音をはかるようにしていたが、やがてゆ  
るやかに向きを変えて、視野から消えた。



## 野火——映画文学人生論

敗残兵は、軍人の本分を忘れて、米兵を射たなかつた自分の行為を反省した。自分のヒューマニティに驚いた。彼はシニスム（冷笑主義）に近い立場をとる無神論者だ。道徳とか倫理とかいう言葉は使わない。なぜぎりぎりの局面で、人肉食や殺人という行為に踏み切らなかつたのか。

もし彼がキリストの変身であるならば・・・  
もし彼が眞に、私一人のために、この比島の山野まで遣わされたものであるならば・・・  
神に栄えあれ。

これは信仰の告白のようにひびく文章だが、意味は信仰の否定のようでもあり、わかりにくい。

『野火』と『俘虜記』は、「生きて虜囚（りよしゅう）の辱（はずかしめ）を受けず」という戦陣訓に反して俘虜になった一兵士の記録。一方、『レイテ戦記』は作戦計画を立案した参謀や作戦を実行する指揮官の行為や逡巡もふくめその全体像について作者が事実と判断したものを出来るだけ詳しく書いた記録である。

太平洋戦争のもっとも苛酷な戦場となったレイテ島の戦いの犠牲者は日本軍八万四千人、アメリカ軍四千人。作者を執筆にかりたてた主な動機は犠牲者の鎮魂だが、結局は「小説家である筆者が見た大きな夢の集約」であるという。

フランスはあまりにも遠し野火かなし